



## 「贅沢な時間」

キャリアデザイン学研究所 1年  
久保田めぐみ

大学院に通いはじめた頃、学ランを着た学部生と言葉を交わしたことがある。「この校舎は複雑ですからね」親切にエレベーターの階数ボタンを押してくれた彼の言葉づかいは、とても自然だった。三十代半ばを過ぎて自分がもう一度学生になるなんて、彼の年齢の時には考えてもいなかった。

あの頃、自分には溢れるくらいの時間があった。授業を真面目に受けていたかどうかはさておき、とにかく時間を贅沢に使っていた。屋外の学生ラウンジで、カッコつけて大して読んでいない新聞を広げていた。いつも誰かがいた部室で先輩から麻雀を教えてもらった。人並みにいくつかの恋をして、大切な人を失ったのもこの頃だった。爪の先まで悲しいという感覚を生まれて初めて知った。

それから、小さな同人誌サークルで小説も書いていた。あの頃は猫があくびしているのを見ただけで短編小説のネタが浮かんだ。長崎や北海道に一人で取材旅行にも行った。合評会でこてんぱんにされて泣いて帰ったこともある。でもあの時、先生たちが自分の作品について書いてくれた書評は今でも覚えている。

自分の将来のことも当時は考えがなかった。目に見えないぼんやりとしたものを決定して形にすることが不安でたまらなかった。卒論を書いている時でさえ「これまであんなに時間があったのに」と、何もしてこなかったことを悔やみ、就職活動にうまくのれない私は落ちこぼれたと思っていた。

そして今。大学を卒業してからなんとか就職し、二回の転職を経験した。アルバイト生活だった時期もある。それでも、こうして働きながら大学院に通えている。

学食の中をスーツ姿で通り過ぎ、賑やかにしている学生に大学生だった頃の自分を重ねてみる。彼・彼女たちに対して「あの頃に戻りたい」という感情が生まれてこないのは、戻ったからといって、あの頃感覚までは取り戻せないと思うからだ。それよりも今、大学院に入学して、長らく実現しなかったことが叶うような気がしている。そのことが嬉しくてたまらない。

学ランの彼に見送られながらエレベーターを降りた時、年齢がどの、学部生がどのと意識しているのが自分だけかもしれないと気が付いた。キャンパスの中には様々な年代の学生が行き交っている。こういうのが、もう当たり前の時代なのだろう。

でも、ちょっとだけ学部生たちに伝えたい。私が今叶えたいと思っていることは、学生時代していたことの延長線上にあるということ。贅沢な時間がくれたものがシナプスのように繋がって、三十を過ぎた今、ようやく形が見えてきている。

だからその学ラン、学生のうちに思う存分着ておいてほしいのだ。

### ● 講評 ●

一回目の学生時代に、不安や悩みを交えながらも、「溢れるくらいの時間」を「贅沢」に過ごしたからこそ、いま「長らく実現しなかったこと」が叶いつつあるのですね。なにより、働きつつ学問を修めることを心から楽しんでいる姿が素敵で、私も学ぶことの喜びを改めてかみしめました。



## 「大学生は自由だ」

文学部 2年  
平野友賀子

「大学生は自由だ」よく言われることである。

私は大学生になってからこの言葉の意味を理解することができたと思う。自由＝何をするにしても自分で決めていいということなのだ。自由という解放感があり聞かえがよいと感じる。だが私にとって自由であることは困ることだった。いままでは部活や受験があり忙しい時間を過ごし、やらなくてはならないことがいっぱい自由というのを感じることがなく、日々があっという間に過ぎてしまったと思う。自由を手に入れた私は正直なところ何をすればいいのかわからなかったのだ。とりえず人並みにサークルに入り、バイトをし、遊びに行き、たまに勉強していた。いつの間にかいわゆる大学生っぽくなっていったと思う。しかしこのそれなりに楽しいこの生活にも慣れると、なにか物足りなくなってしまう。

そんな時に目に入ったのは大学の夏季短期語学留学だ。これいいじゃん！行きたい！と思った私は申込をし、マ

レーシアに1か月行くことが決まった。海外に行くのは初めてで、親や友達と一緒に行くわけでもない。不安な気持ちもあったが、まあなんとかなるさと強い気持ちをもつことにした。そうしてマレーシアに行くと、日本とは違うことばかりだった。様々な国籍の人がいて、宗教も違う、物価も違う、食べ物も違う。この違いが面白く、すべてが刺激的だった。そして前は考えなかったことを考えるようになった。友達になったバーレーンの女の子はイスラム教のため肌を見せないような服を着ている。その女の子に「日本はどんな宗教を信じているの？」と聞かれた。宗教のことを意識してこなかった私はうまく答えることができなかった。宗教ってなんだろう？わたしのうちに大きな？が生まれた。それだけではない。どうしてマレーシアは日本と比べてこんなに物価が安いのだろうか？物価が安いということはそれに伴って給料も安いのだろうか？マレーシアに住んでいる人の給料はいくらなのだろうか？どんな仕事をしている人が多いのだろうか？私の中でたくさんの？が生まれ、ひとつ？が生まれると、また新しい？が生まれる。そしてその解答が知りたいと思った。さらに、知らない人だらけの環境でもどうにかやっていけるじゃんと思い、自分に自信がついた。これから一人で海外旅行もできるし、自分で家事をやり、親がいなくても自立した生活が送れると。こんな経験は自由な大学生のうちにしかできなかったと思う。

自由である、つまりたくさんある時間をやりたいことに費やせるということなのではないか。そしてたくさんある時間は自分の可能性を広げることができるのだと思った。私は夏休みというまとまった時間がある中で、留学をし、新たな発見をし、可能性を広げることができた。これからは私はこの大学生活の中でいろんなことをしてみたい。やったことのないことをしてみるのには勇気があるけれど、新しいことに一歩踏み出すのも悪くないのかもしれない。

### ● 講評 ●

自由な時間の中でいかにやりたいことを見つけるかは、大学生であればだれもが考え模索することだと思います。はじめての海外体験をやり遂げたことで自信がついた筆者が、次にどのようなことに挑戦するのか楽しみです。



## 「成長という意味」

文学部 1年  
小島周

成長するにつれて自分の夢が恥ずかしくなくなった。成長するにつれて夢を語ることは恥ずかしいことと感じるようになった。「恥知らず」や「現実が見えてない」、「夢見がち」と思われるのが怖くなって、無難に、普通になろうとする。社会を知り始めた。周りが見えるようになってきた。それが成長なのだろう。そういう考えに至ったのは高校生ではなくなった頃。

僕は昔から物語を読むのも考えるのも好きだった。けれどそれを書くことを職業にして生きていくのは難しい。作家として生計を立てている人は僕にとって浮世離れした仙人のようで、自分がそうやって生きていけるとは全く考えられなかった。ただ好きだけで、好きだから勉強を楽しめただけで、日本文学科へ入学できてしまった。「なんで日本文学？」と、友達に聞かれても笑ってごまかす。作家になりたいと言うくらいなら漫画家を目指していると言って笑いをとった方がマシだと思っていた。

大学が始まったころ、先輩に2年生からのゼミの話聞く機会があり、自分が文芸創作に関係するゼミを選びたいと言ってみた。笑われたり引かれたりすると思っていた。しかし先輩はただ、「小説とか書きたいならいいかもね～」と言い、話をつづけた。あまりにも淡々とした答えに僕は衝撃を受け、自分の夢を自分が勝手に否定していたことに気付いた。

今までの僕は成長しているのではなく、時間の流れにただ流されていただけだった。それに気づかない間はきつと、死ぬまで周りに流されていた。嬉しいことに、日本文学科には仙人だと思っていた作家の先生から教わることができる。少なくとも大学を卒業するまでは、流れに逆らって自分の夢に向かっていきたい。大学1年の夏、僕はそう思うようになった。

今は、自分の将来の可能性に向かって歩き始めるのが成長だと思う。僕にとっては、この文を書くことが可能性に向かっての第一歩だ。

### ● 講評 ●

夢を勝手にあきらめる自分。胸が痛い。私の中にも何人もそんな自分がある。でも、どこか心の隅に細々と夢を生かしておきたい。ちょっとしたきっかけで Spark するかも。そんな、きっかけが大学のゼミにはあることを筆者が教えてくれている。

## F D川柳受賞者発表

### F D川柳大賞

隣にい？ 新たな友情 新学期

多摩キャンっていいよね。

### 入選

らく単を 減らして授業の 質改善

いよいよ卒業

ありがとう 55年館 床の音

Ma o

研究室 行くではなくて 帰ると言う

研究室は第二のホーム

学生の 声を忖度、 F Dで

桜田東樹

F Dは、学生からの ラブレター

桜田東樹

分からない 教員名欄 この試験

雪田修一

試験あと やつと火が付く 本気かな

雪田修一

知識とは 「優しさ」と知る 我が母校

雪田修一

S G U 学生だけが グローバル

ドメ就職員 (r-w)

12時間 図書館籠り 夢掴む

8代目山影

驚異的 締め切り間近の 集中力

7代目山影

知りたいと 思う心は いつまでも

林風輝

### 佳作

遠いけど 朝早いけど 行く絶対

伊島尚純

学びたい 最前列に 友と出会う

山田佳男

空きコマを 寝るも使うも 君次第

山田佳男

我を知り 他人(ひと)を知ることが 学びなり

一ノ瀬由梨

大教室 ここにあったか 青い春

多摩キャンっていいよね。

特等席 教卓前より 画面前

ねこさん

「わからない」認めて初めて 学ぶのだ

ねこさん

筋トレを しながら学んだ 英会話

林風輝

授業中 手を挙げた後の 爽快感

ちいすけどん

面白そう 取りたい授業 一限の法則

ちいすけどん

休講は 昔喜び 今怒り

ねこさん

研究室は第二のホーム